



Title	書評：名ざしと名づけのあわいで：あらたな関係性を紡ぐ場所としての言葉（茶園敏美『パンパンとは誰なのかーキャッチという占領期の性暴力とGIとの親密性』）
Author(s)	日高, 由貴
Citation	日本学報. 2016, 35, p. 267-274
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/55493">https://hdl.handle.net/11094/55493</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

書評：名ざしと名づけのあわいで（日高由貴）

## 書評：名ざしと名づけのあわいで ——あらたな関係性を紡ぐ場所としての言葉

（茶園敏美『パンパンとは誰なのかーキャッチという占領期の性暴力とGIとの親密性』書評）

日 高 由 貴

### はじめに——本書の主題と、言葉の宛先

——パンパンとの<sup>であい</sup>出愛。

いささか風変りな漢字をあてられた、「出愛」という言葉から、本書は始まる。

「はじめに」において、著者自身が、「見知らぬおとこたち（彼ら）」に、突然「あいのこ」と呼ばれる経験をし、恐怖心を抱き続けてきたこと、そしてその得体の知れない恐怖の原因が、第二次世界大戦後の占領期の日本において「パンパン」と呼ばれていた人々にかかわっていることを知ったいきさつが記されている。

パンパンとは、占領期に大勢いた、GI（米兵）と交際するおんなたちのことだ。当時、自らのことをパンパンと名乗っているおんなたちも存在したけれど、一般に世間では、性的サービスを有償で行なう売春婦、いわゆる街娼（街角に立って客引きをする娼婦）のことを、侮蔑的な意味をこめてパンパンといった。彼女たちは、夜の女、闇の女、パン助などさまざまに言われていた。なかでもパンパンということばが、当時の世間の人々に一番インパクトを与えた（10-11頁）。

「パンパン」という名称は、「おんなたち」によって名乗られることもないわけではなかったが、侮蔑的な意味を込めて名ざされるときに使われることの多い言葉であったことをまず確認しておきたい。実際に占領期を生きた人々のなかで、「パンパン」という言葉を口にすることさえ、侮蔑に加担するようで躊躇するかたもおられるということを、著者からうかがったことがある。

サブタイトルにある「キャッチ」とは、「占領期の日本各地でGHQのMP（Military Police／米軍の警察）によってパンパンとみなされたおんなたちが、強制的に性病検診を受けさせられるため」にされていた検挙を指す言葉である（17頁）。

「キャッチ」は、占領期の研究に携わる者の間ではよく知られているが、世間的にはそれほど知られていない。わたしも、著者の研究を知るまで「キャッチ」という言葉を知らなかったひとりである。

第二次世界大戦中の従軍「慰安婦」という言葉に比べて、「キャッチ」という言葉が知られていない理由として、著者は以下の二点を挙げている。

一点目は、キャッチの対象がGI相手の売春婦だったため、たとえそれが人権を侵害するような暴力的な行為であっても、「売春婦ではないわたしには、関係ないこと」として認識されてきたこと。

二点目は、キャッチの対象になるということが、GI相手の売春婦、いわゆるパンパンであるというスティグマを負わされる状況のなかで、キャッチの被害者だと表明すれば、世間から元パンパンというレッテルを貼られることになり、被害者が被害を受けたことを恥じなければならぬ状態を生み出すという理由、そして、交際していたGIとの思い出を、そっと胸の内に秘めておきたい、というおんなたちの気持ちによる理由によるものであるという。

一点目の理由は、「兵士には性的慰安が必要」という男性神話にもとづいた、「守るべき女性」と「犠牲にしてもよい女性」という二分法の暴力とも結びついている<sup>1)</sup>。無理やり慰安婦にさせられた人々は救われなければならない（他人事ではない）が、自ら望んだ場合は侮蔑されてもしかたがない（わたし／わたしたちとは関係がない）、という論法は、性産業に従事する人に対する差別を正当化するまなざしも重なっており、現在にいたるまで続いているといえよう。

また、二点目の理由は、「パンパン」と呼ばれた人々をどのように記述するのか、という記述の問題にかかわっている。

本書は、2007年3月23日に博士号を授与した、大阪大学大学院文学研究科博士論文「パンパンとは誰なのか——「あこがれ」と欲望のゆくえ」をもとに書かれたものであり、その言葉の宛先は「強制的性病検診という性暴力の犠牲になり、尊厳を奪われたまま、いまだに沈黙を守っているお姉さまがた」、「占領期や朝鮮戦争時代にGIと親密な関係を過ごした思い出を外部の手で傷つけられないよう、今も胸の内にそっと大切にされているお姉さまがた」、「そして現在、あらゆる風俗業に従事している姉妹のかたがた」（31頁）に向けられている。そのため、なるべく専門用語を使わず、注釈も最小限にとどめるよう意識されている。くわしくは後述するが、冒頭で述べた「出愛」のほか、言葉の遣い方、表記についてもさまざまな工夫がなされている。

本書の主題は、占領期におこなわれた「キャッチ」という暴力を、現在も続いている問

題として、「他人事ではない」問題として、ともに考えてゆくあらたな関係性を紡ごうとすることにあるといえるだろう<sup>2)</sup>。

2014年9月に刊行された本書については、すでにいくつかの書評が書かれており、新聞記事でも紹介されるなど、蓄積がある<sup>3)</sup>。ここでは、それらの書評及び関連記事と、書評会に数回参加させていただいた際の議論をふまえて、本書に対する応答をこころみたい。

## 2. 名づけること、繋がること

これまでの書評において、評者たちが著者の研究に敬意を払いながらも指摘している点はある程度共通しており、先述した「パンパン」と呼ばれた人々をどのように記述するのか、という問題にかかわっている。乱暴なまとめ方であることを承知の上で論点を整理すると、「パンパン」と呼ばれた人々に対する記述が、著者の意図とは別に、「パンパン」を一方向的に被害者とまなざす言説を再生産する危険性、そして「パンパン」と呼ばれた人々の主体性を強調することが、結果として同じまなざしを反転させるにとどまり、言説の構造自体は温存される危険性があるという指摘である。言葉をかえれば、著者が「パンパン」と呼ばれた人々を従来とは異なる視点で見ようとするあまり、自らの思いを投影してしまい、あらたな表象の固定化を生み出すことの危険性ともいえる。

すこし長くなるが、書評のうち、該当する箇所を以下に引用する。

天に唾するつもりであえて指摘させてもらうが、たとえば、ある人が「語りの背後に」「相当なトラウマを抱えている」と推定すること（136頁）、「キャッチから性病検診にいたる一連の行為は、おんなたちの身体が性暴力の傷でずたずたにされていることを示している」（193頁）と解釈することは、果たして被害者が「被害を受けたことを恥じてしまう状況」、あるいは、「GIと親密だったことが『恥』と感じさせてしまう圧力」（281頁）をつくり出す言説に与していないだろうか<sup>4)</sup>（青山薫）。

メアリー・L・ブラットの「コンタクト・ゾーン」——植民地のような支配／被支配という非対称な関係が存在するなかで、異質な文化が互いに出会い、衝突し格闘する場——という概念に依拠する著者は、一方で、支配する者／される者といった力関係で人間関係をみたくないと述べる。この思いは、今なお彼女たちが声をあげられない理由に二分法的な見方があると感じている著者の研究者としての責任に支えられている。だがこの思いと責任感は、別の形で当事者の声の篡奪を行ってしまっていないだろうか。彼女たちの主体性を強調することによって<sup>5)</sup>（佐藤文香）。

## 書評：名ざしと名づけのあわいで（日高由貴）

「大部分」のおんなたちが、セクシュアリティを含めて「私のことは私が決める」自立した主体であったとする著者の主張は、他方で、性暴力を受けたおんなの語りを「語れないほどおどましい経験からの無意識の精神的防御反応」へと押し込め、おんなたちの分断を強化することにつながってはいないだろうか<sup>6)</sup>（小路万紀子）。

これらの指摘に対して、記述の危うさと難しさをわたし自身の問題としても考えながら、ここではあえて別の視点を提示してみたい。

本書においては、冒頭でも述べた「出愛」のほか、「お愛する」「おんなたち（性別のひらがな表記）」など、著者の独自の言葉の遣い方の工夫が随所に見られるが、初めて読んだ時に最も印象に残ったのは、著者が、本書に登場する「お姉さま方」を呼ぶ際に選んだ方法である。それは、本名を記すのではなく、イニシャルを記すのでもない、花や四季の名前を贈るという方法であった。この方法を選んだ経緯については巻末の謝辞において述べられているが、著者は、自身が交通事故で嗅覚を失った経験を通して、その経験が性暴力を受けた「お姉さま方」と同じではありえないことを自覚しながら、「沈黙」を言葉で語ることの暴力性と痛みを引き受けつつ、よりそおうとしている。この方法こそ、本書を特徴づけているのではないかと考える<sup>7)</sup>。架空の名前を贈り、さらに著者自身の痛みをとまなう体験、その体験について語れなくなってしまったことと、「お姉さま方」の沈黙をそっと重ね合わせるという二重の工夫によって、記述によるあらたな暴力を自覚的に引き受けようとする意思が透けてみえるように思う。

2015年7月2日に立命館大学で行われた書評セッション<sup>8)</sup>において、西川祐子氏はこの表現方法を「アクロバット」と称したが、わたしも、この表現方法に新たな視点と可能性を見出したひとりである。

また、この書評セッションには、京都市左京区のラーメン屋「ますたに」のカズさんも参加されており、ご自身と「お姉さん」たちの体験を語られた。本書が新聞で紹介された記事を見て、カズさんから著者に連絡があったそうである。記述による表象の暴力は避けられないかもしれないが、本書によって、いままで沈黙していた、あるいはせざるを得なかった人々との対話の機会がつけられたことも、言葉が生み出した重要な軌跡のひとつとして記しておきたい<sup>9)</sup>。

### 3. 結びにかえて

——頁を繰る指をはじめに巻き戻そう。

本書は、侮蔑的な表情を浮かべた「見知らぬおとこたち（しばしば年配のおとこたち）」

に、「あいのこ」と小声で名指されてきた著者自身の経験から語り始められており、記述する者の経験と、「沈黙」に寄りそうための言葉を丁寧につなげようとする方法は、はじめと終わりにおいてしずかに呼応しあっている。

最後に、「おんなたち」というひらがな表記についてすこし述べてみたい。著者は、この表記にこだわる理由について、以下のように述べている。

CONTACT・ゾーンという概念を知って、わたしが性別をひらがな表記にこだわっているのは、出自の異なったおんな同士、おとこ同士といった同性関係、あるいは、おんなとおとこといった異性関係を、非対称の関係でみたくないということに気づいたのだ。もっと直接的にいうと、支配する者／される者といった力関係で、人間関係をみたくないという考えのもとに、あえてひらがな表記にこだわってきた。さまざまな背景をもつ者同士が交渉し交流することによって、豊かな関係性を紡いでいくという視点で、人間関係をみたいのだ。さらに、自身を指し示すことばについてもひらがな表記にこだわる理由は、セクシュアリティも含めて決定権は自分にある、という考えに基づいている（23頁）。

女、でも女性、でもなく、「おんなたち」という独自のひらがな表記を選択した背景には、人間同士の関係性を非対称なものとしてみたくない、という著者の思いがある。その思いに賛同しながらも、わたし自身は、「おんなたち」という表記にはまだなじめずにいる。この文章において、本文の引用をのぞいて、「パンパンと呼ばれたおんなたち」ではなく、「パンパンと呼ばれた人々」という書き方を選んだのは、そのためである。関係性を非対称なものとしてみない、ということと、ある人間の尊厳を尊重する、ということとの間には、一足飛びには繋ぐことができない溝が存在しているように思うからである。「非対称な関係なのだから、つながることは不可能である」と言いたいのではなく、個々のコンテクストにおいて、なにが、だれによって非対称とみなされているのか、なぜそれが非対称とみなされているのかということ、さまざまな角度からひとつひとつほりおこしていくことによってしか、その溝に橋を架けることはできないのではないと思う。

勝手な推測でおこがましいのだが、本書が、膨大な時間と労力によって集められた資料にもとづいて、丁寧に書かれたものであるからこそ、著者が「おんなたち」というひらがな表記にこだわりつづけ、選択した理由は「CONTACT・ゾーン」という概念だけで説明のつくものではなく、まだ言語化されていない別の理由もあるように思う。

著者に「あいのこ」という予測不可能な爆弾を浴びせてきた「見知らぬおとこたち」は、

書評：名ざしと名づけのあわいで（日高由貴）

「彼ら」と太字で表記されている。著者にとっては、彼らは多くの場合、年配のおとこたちであったと記されているが、「彼ら」とは、性別や国籍や年齢にかかわらず、だれかを侮蔑をこめて名指す習慣や、一枚岩にとらえようとする思考様式そのものと考えられることもできるかもしれない。

おそらく、「彼ら」はわたしたちひとりひとりのなかに、程度の差はあれ、多かれ少なかれ存在している。新しい関係性を築くために言葉を紡ぐ行為は、なによりもわたしたち自身による、自分の内面にひそむ「彼ら」との闘い、そして対話でもあるだろう。

あなたに、お愛できることを願いつつ。

という、一番最後に記された著者の言葉と思いは、いくつものあらたな出愛を呼び、繋いでいこう。

本書のはるかな旅路に、これからも同伴させていただけることを願っている。

注

- 1) 「占領期の性暴力問い直す 慰安所、パンパン…相次ぎ研究書」京都新聞、2015年4月3日 19時2分。<http://www.kyoto-np.co.jp/politics/article/20150403000141> (2015年11月24日取得)。
- 2) 富山一郎は、「他人事ではない」という身体感覚について以下のように述べている。「『パンパン』と呼ばれた人々への「キャッチ」という暴力を描き出した、茶園敏美の『パンパンとは誰なのか』（インパクト出版会）の記述は、茶園自身の、既に他人事ではないという身体感覚とともにある。『既に他人事ではない』という事態は、他人事として切り離すことにより維持されてきた時空間の崩壊でもあり、茶園はそこに踏み留まりながら、「キャッチ」を言語化する。それが、暴力に曝されている自身の知覚から紡がれる言葉たちにより担われるがゆえに、同書は、過去の占領期研究ではなく今を問う作業となるのだ」富山一郎「2014年読書アンケート」『みすず』No.634、2014年2月、pp. 64-65。
- 3) 書評、関連記事については、文末に参考資料として記載した。これらの資料については、茶園さんご本人よりデータをいただいた。調査の準備でお忙しい中、便宜を図ってくださったことに感謝します。
- 4) 青山薫「暴力は目下、継続中——語られなかった歴史を語る場の構築」『週刊読書人』2014年11月28日。
- 5) 佐藤文香「GIと交際していた女性たちの沈黙を打ち破り、彼女たちの声を聞く——占領期の複雑な性現象についての研究を大きく前に進めた、重厚な研究成果」『図書新聞』第3195号、2015年2月21日。
- 6) 小路万紀子「〈闇の女〉に見る社会性、その広がりを描く（書評：茶園敏美『パンパンとは

書評：名ざしと名づけのあわいで（日高由貴）

誰なのか』』『年報カルチュラル・スタディーズVol.3』航思社、2015年。

また、小路は、「おんあなたを犯罪者ではなく患者として丁寧に扱おうとしたPHW（公衆衛生福祉局）のスタッフたちの良心は、問答無用に行使されるキャッチの暴力には無批判であり、論点を単に治療の問題へと置き換えている点で、帝国主義的欲望と無縁ではない」とも指摘している。

7) 「性暴力をこうむったお姉さま方の記憶と交通事故のわたしの記憶。比べることはできません。だけど、占領期当時のお姉さま方の体験を、当事者でないわたしが共有することも簡単ではありません。花や四季を思わせる名前をお姉さまがたに名づけることで、一時的にせよ嗅覚を失ったことで、楽しかった思い出が語れなくなってしまったことや、交通事故の記憶をいまだに語りすることができないでいるわたし自身の体験をみつめながら執筆することで、沈黙されているお姉さまがたに寄り添ったかったのです」(293-294頁)。

8) 2015年7月2日(木) 18:00~20:00/場所:立命館大学衣笠キャンパス 末川記念会館第3会議室/司会:上野千鶴子/コメンテーター:米岡裕美/宮田絵里/応答:茶園敏美/<主催>立命館大学国際言語文化研究所 ジェンダー研究会、<共催>立命館大学生存学研究センター。イベントURL (2015年11月27日取得):

[http://www.ritsumeiji.ac.jp/acd/re/k-rsc/lcs/kenkyu\\_main.html#gender\\_review](http://www.ritsumeiji.ac.jp/acd/re/k-rsc/lcs/kenkyu_main.html#gender_review)

9) 2014年12月7日(於 堺町画廊/コメンテーター:西川祐子、三橋順子)、及び2015年1月24日(於 京都大学文学部新館地下大会議室/報告者:平井和子・茶園敏美)において、佳苗珈琲の佳苗さんとオーガニックレストランのカイラスレストランのまりこさんが、薫り高いコーヒーとお菓子で、場を和ませてくださっていたこともつけ加えておきたい。本書の言葉の宛先が、狭い意味での「研究者」のみではなく、さまざまな立場の人々に向けられていることと、本書が議論される場所、集まっていた人々が多様であったこととは結びついていると考える。

参考資料(書評・関連記事)

青山薫「暴力は目下、継続中——語られなかった歴史を語る場の構築」『週刊読書人』2014年11月28日。

高橋芽惟「フェミの本棚」『わたしの21世紀』No.80、アジア女性資料センター、2014年12月。

上野千鶴子「火傷を負う『慰安婦』問題」『毎日新聞東京』夕刊、2015年1月20日。

小路万紀子「〈闇の女〉に見る社会性、その広がりを描く(書評:茶園敏美『パンパンとは誰なのか』)』『年報カルチュラル・スタディーズVol.3』航思社、2015年。

富山一郎「2014年読書アンケート」『みすず』No.634、2015年2月。

佐藤文香「GIと交際していた女性たちの沈黙を打ち破り、彼女たちの声を聞く——占領期の複雑な性現象についての研究を大きく前に進めた、重厚な研究成果」『図書新聞』第3195号、2015年2月21日。

京都新聞社「占領期の性暴力問い直す 慰安所、パンパン…相次ぎ研究書」京都新聞、2015年4月3日19時02分。<http://www.kyoto-np.co.jp/politics/article/20150403000141> (2015年11月24日取得)。

上野千鶴子(聞き手 永峰好美)「戦後70年 社会に変革もたらす」『読売新聞』2015年9月24日。



書評：名ざしと名づけのあわいで（日高由貴）

上野千鶴子（M. L. ロバーツ著『兵士とセックス 第二次世界大戦下のフランスで米兵は何をしたのか？』書評）『北海道新聞』2015年11月1日。

（ひだか ゆき 京都大学人文科学研究所研究員）

（インパクト出版会、2014年）